

---

# バカと双子と妹馬鹿達

ライヒ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと双子と妹馬鹿達

### 【Nコード】

N6180P

### 【作者名】

ライヒ

### 【あらすじ】

テストの点によってクラスが変わる文月学園、そんな学園に通うことになった少女、坂本雄南は問題児だらけのFクラスでも頑張ります!!!  
でも体が弱いよ。

## 登場人物紹介

### 登場人物紹介

#### 名前

坂本 さかもと 雄南 ゆうな  
Fクラス

#### 説明

坂本雄二 さかもと ゆうじ の双子の妹。

性格は控えめでおしとやか。かなりの美少女。

体が弱く、病弱というより半病人というのがしっくりくる感じ。そのため小食で、それを補うために栄養剤などを携帯している。

生まれてからすぐに体調を崩し、ほぼずっと病院で暮らしていたためにかなりの世間知らずで、そのおかげで元から常識から外れているFクラスにもなじんでいる。

学校に通う際に、学園ものの漫画（百合漫画・お嬢様たちの楽園）を見て勉強したため言動や公共マナーなどがなんか変。

霧島翔子の双子の兄である霧島翔都とは幼いころは親しかったが、とある事件から疎遠になってしまった。本人はその事をよく覚えてない。

テストの点はFクラスに入るだけあってダメ。しかし元神童である雄二の妹なので飲み込みは速く、いざという時の機転も回る。

料理はおいしいことは美味しいのだが、多数の栄養剤や薬品を入れて作るため材料を教えられるとなんだか微妙な気分になる。

## 名前

霧島翔都 Aクラス

## 説明

霧島翔子の双子の兄。

性格は穏やかで世話焼き。

切れ長の目やつやのある黒髪など翔子との血の繋がりを感じさせるが、常に無表情の翔子と違い常に笑顔を絶やさない。

坂本雄南とは昔は親しかったが、とある事件から責任を感じて距離をとる様になった。また、その事件がきっかけで坂本雄二からはい

い感情を持たれていないが、本人はそれをしょうがないことだと思  
っている。

テストの点は奇跡かと思うほど翔子と同じ、今までお互いに別々の  
点数を取ったことが一度もない。そのためAクラスのクラス代表は  
二人いる。

## 登場人物紹介（後書き）

こんな感じで進めていきます。  
更新は遅め。

## 第一問 再開（前書き）

明久との出会いから。基本的に一人称で進めていく予定です。

## 第一問 再開

「ねえ、ゆうな雄南」

「何ですか、とよひこ翔都君」

「雄二と翔子って仲良いよね」

「……そうですね」

「ところで雄南の好みのタイプは」

「なぜいきなりそのような事を」

「ちょっとした知的好奇心という事で」

「…えーと」

「……（うくり）」

「兄さんみたいなの」

「！？」



「あの…少しよろしいでしょうか？」

「へ？」

そう言って、その女の子は僕に話しかけてきた。

「えーと…何かな？」

「はい。私は今日から文月学園に通うことになったのですが、場所がわからず…。失礼ながら貴方は文月学園の生徒だと思いましたが、声を掛けさせていただいた次第です」

すごい、何がすごいってこんなに丁寧な日本語を聞いたのは久しぶりだ。僕の周りには悲しいほど男しかいないから、敬語なんてほとんど使わないんだよね…。

「…あの？」

「え、ああ、ごめんごめん。案内だよね？ ならできよ。ただ、この時間だと完全に遅刻しちゃうけどね…」

もともと遅刻することは覚悟していたし、いまさらそれくらいで僕の評価は下がらないと思っていたから気にして無かったけど、それを聞いた女の子の顔がどんどん申し訳なさで曇っていく。

「え、…そ、それは失礼しました。それでは道を教えてくれるだけでもいいです。私のせいで貴方が遅刻してしまうというのも本末転

倒ですし」

「いや良いよ。どうせ遅刻するつもりだったし、それに転入生を案内していたら遅れたっていうのは口実になるだろうしね」

とつさに口から出まかせを言った僕。でもとつさだったせいであり失礼な物言いになっちゃったな、これって言い方を変えれば転入生をダシにして評価を上げる事なんだから。

でもそれに反して女の子はくすりと笑う。それは誰もが見とれてしまうくらいに美しい笑顔だった。

「では……お願いします」

「へー、じゃあ雄南ちゃんはいままでずっと病院にいて、学校に通うのってこれが初めてなんだ」

「はい。体調もやっと落ち着いてきましたので退院許可が出たのですが、いままで通信教育だったために学校というものがどういふものなのかわからず……。失礼ですが、私の話し方は大丈夫ですか？  
一応本で見て勉強したのですが」

「うーん、大丈夫だと思うよ。でもちよつとしゃべり方固いかも。もうちよつとやわらかくてもいいと思うよ」

柔らかく……ですか……。とぶつぶつ呟いている雄南ちゃんを見なが

ら、僕はなんだか納得していた。

雄南ちゃんを初めて見た時、人形みたいな顔立ちに長い髪、文句なしの美少女だったんだけど、不思議と儂いという印象が強く残っていた。きつと真夏の日に外に出たらあっという間に倒れてしまうんじゃないかと思うくらいに身体が細い。生まれたころからずっと病院にいたのなら頷ける。

「……本当なら急ぎたかったのですが、激しい運動はまだ許可されてなくて」

「いやだから気にしてないから良いよ。それに可愛い女の子と一緒に道を歩けるなんて幸せだからね」

うああ！ 僕はドサクサに紛れてなんて事を！！ 恥ずかしすぎて顔から火が出るよ……。

「か、かわ……」

見ると雄南ちゃんも雄南ちゃんでもかなり動揺しているようだ。顔が真っ赤になって可愛い。

「あ、ご、ごめんね。いきなり親しくない奴にそんなこと言われても困るだけだよね」

「い、いえ……。言われ慣れてないので驚きましたが：大丈夫です。それに、そういう思ったことを素直に言うのは吉井さんの長所だと思いますよ」

そう言うってから、沈黙が流れた。

き、気まずいな…。

そう思っているうちに、僕らが通う学校である文月学園が見えてきた。

そういえば、振り分け試験があったからAからFまでクラスが分けられてるんだよね。かなり解けた方だと思うから大丈夫だと思うんだけど…さすがに最低クラスのFクラスには男の意地と誇りをかけてなりたくない。

「吉井、遅刻だぞ」

玄関で聞こえてきたドスの利いた声。見てみると、そこにはいかにもスポーツマン然とした筋骨隆々の男が。生活指導の鬼、西村教諭だ。

「あ、鉄じ　　じゃなくて西村先生。おはようございます」

「いま、鉄人と呼ばなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

ふう、危ない危ない。危うく鉄人って呼んでしまう所だったよ。ちなみに、西村先生が鉄人と呼ばれる理由は趣味がトライアスロンだからだ。

「あ、あの…。私はこれから文月学園に転入する事になります『坂<sup>さか</sup>本雄南』と申します。以後お見知りおきを…」

「ああ、君が学園長の言っていた生徒か。ようこそ、文月学園へ。歓迎するぞ」

へえ、雄南ちゃんの名字って坂本だったんだ。僕の知り合いにもそういう名字のやつがいるな。もっとも、彼女とは天と地ほど違うけど。

「それで、吉井、遅刻の理由はあるんだろうな」

「あ、はい。雄南ちゃんを案内していたら遅れちゃいまして」

「ふん…なら今回の事は見逃してやろう、だが遅刻はしないように」と、人聞きの悪い事を言う先生。むう、さすがにこれは反論しないよ。

「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ？」

「遅刻は、な。ほら受け取れ。坂本にもだ」

「はい」

先生が封筒を取り出して渡してきた。これこそが振り分け試験の結果が書いてある紙だ。これに書かれている内容によって今後僕の学園生活は大きく左右される事になる。

封筒は固くのりづけされていて、中々剥がせそうにない。しょうがない、破くか。

「坂本はFクラスか。まあ病院の中では勉強にも限りがあるし、今

後に期待だな」

「あ、あうっ…」

隣では雄南ちゃんが結果の紙を片手に落ち込んでいた。雄南ちゃんにはまさかのFクラスか、かわいそうだけど、僕にはどうする事も出来ない。

ビリリと音を立てて封筒が破れる、そして中に入っていたのは一枚の紙。さてさて、僕のクラスはどこかな。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

なんか、かなり失礼な事を言われた気がする。

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて渾名を付けられちゃいますよ？」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

まあ確かに僕は普通のレベルの生徒と比べるとほんの少し劣っているという自覚はあるけど、そこまでバカ呼ばわりされるほどじゃ

ない。

そう自負しながら僕は紙に視線を落とす。さっきは先生に聞かれたせいで見れなかったけど、僕のクラスはDかな、それともCかな。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

「あ……」

隣で雄南ちゃんが呆然とした声を上げる。どうしたのかな、視線は僕の紙に向いてるみたいだけど。

そして紙に書いてあったのは、

『吉井明久…… Fクラス』

「お前はバカだ」

こうして、僕の最低クラス生活が幕を開けた。

そして、

「…… Fクラス……」

彼女の最低クラス生活も、幕を開けたのであった。

「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

「……こういうのってやっぱり普通じゃないんですか？」

雄南ちゃんと一緒にあまり入ったことのない三階に足を踏み入れると、そこにあったのは普通の教室の5倍くらい大きさがあつた教室だった。そして雄南ちゃん、いくらなんでも一般常識なすぎると？

「ねえねえ、ちょっと見てみようよ」

「…良いのでしょうか？」

渋る雄南ちゃんを誘って近くにあつた大きい窓をのぞく。

「皆さん進級おめでとございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

Aクラス担任の先生は、髪を後ろの方でお団子状にまとめ、眼鏡をかけた美女。

黒板ではなく壁全体をおおつほどのプラズマディスプレイに名前が表示された。すごい、あれいくらかかるんだろう…。



「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

手が上がることはない。まあ当然だよ、これで不満があったら罰が当たるレベルだよ。

クラスは五十人の生徒が授業を受けるには不釣り合いなほど大きかった。ゴミ一つない教室の天井の部分はガラス張りでスイッチ一つで開閉できるようになっていて、壁には格調高い絵画、部屋の隅には観葉植物が置かれている。高級ホテルのロビーみたいだ。

「では、初めにクラス代表を紹介します。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、長い黒髪をなびかせた美少女。物静かな雰囲気や整った容姿も相まって、何処となく神々しささえも感じる。

「……霧島翔子です」

そしてもう一人席を立った人物がいた。

切れ長の目につやのある黒髪、口元に浮かべられた笑みと瞳の奥の優しい光が特徴的な男性。

「霧島翔都です。よろしくお願いします」

名前からもわかるとおり、翔都くんは霧島さんの双子の兄だ。僕

も一年の頃少しだけ面識があったりする。

かなりかつこいいのにまだ彼女の一人もいない。彼は恋愛に興味がないと言っていたけど、本当なのだろうか。

実はこの二人、一年のころから有名だったりする。その容姿もそうなんだけど、何より目を引いたのは、文月学園に入学する前からなんと全てのテストの点数がまったく同じらしい。

Aクラスのクラス代表が二人いるのもそのためだ。まったく同じ点数だから学園がどちらか一人を選ぶことができなかったため。

霧島さんの視線はクラスの全てを見回しているようで、実は同性の人達にだけ向けられていた。なるほど、噂は本当だったんだね。

才色兼備の霧島さんは昔からよく告白されていたみたいなんだけど、その全てを断っているらしい。それで、『彼女は同性愛者なんじゃないか』って噂が立ってるみたい。

「あの……吉井さん。そろそろ行きませんか……」

「あ、そうだったね、ごめんごめん」

「そうだ、僕達も急がないと。」

僕は雄南ちゃんと一緒に僕らのクラスメイトがいるFクラスの教室に歩いて行った。

Fクラスに向かう途中、吉井さんがこんな提案をしてきました。

「僕思っただけだね、やっぱりクラスのあいさつは最初が肝心だと思っただよ」

「そうなんですか？」

吉井さんは明るくクラスに入ることでお茶目な印象を持たれようとしているみたいです。でもFクラスの前でひそひそと話をする姿は、かなり怪しいんじゃないでしょうか。

「じゃあ、まずは僕がお手本を見せてあげるよ」

「はい、頑張ってください」

そして吉井さんは教室の扉をがらりと開けて、開口一番こう言いました。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

………今のは、歓迎のあいさつなのでしょうか？

「聞こえないのか？ ああ？」

どうやら吉井さんに先程の言葉を投げかけた人のようです。

あれ？

この声、どこかで、聞いたことがある、ような。

恐る恐る、確かめてみると。

「ん？ 明久、後ろにいる奴は……」

時が、止まる。

「あ……」

「な……」

「え、どうしたの？」

吉井さんの言葉は、もう私には聞こえていませんでした。

だって、そこにいた人は。

「……ん」

「えっ？」

「兄さん！」

私の双子の兄だったのですから。

## 第一問 再開（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？雄南ちゃんと翔都君、まだ召喚獣の姿や武器が決まっています。もしこれがいいという意見があれば、どんどんお寄せください。

## 第二話 紹介

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』

『宜しい。これより 二・F異端審問会を開催する！！』

見るも酷かった教室、それが今は一転。暗幕が張り巡らされ外の光を通さなくなっている。

和気あいあいと喋っていたクラスメイトも今は昔。いまは黒い覆面で顔を隠した執行者になり変わっていた。まあ、僕もその一人になって叫んでるんだけど。

そして僕らは皆、ぐるりとある人物を囲うように立っている。

その人物とは、

「離せコラ！ 俺が一体何をしたと！？」

「ご存知、僕の友人の坂本雄二だ。まさか知り合いの中から異端者が出るとは……。」

『罪状を読み上げたまえ』

『はっ。須川会長。被告、坂本雄二（以下、この者を甲とする）は今日の朝教室に入ってきた謎の美少女（以下、この者をシスターとする）に何と「お義兄ちゃん」と呼ばれた事で……。」

「待て！ 言葉のイントネーションが変だぞ！！ あとお兄ちゃんとは呼ばれていない！ 自分達に都合のいい事実を捏造することへっ！？」

雄二がうるさくて聞こえなかったから、頸動脈を抑えておいた。何かぐったりしてるけど無視だ。

『つまり、結論は？』

『美少女にお兄ちゃんと呼ばれて羨ましいであります！！』

『うむ。実に解りやすい』

さて、議論がまとまった所で雄二の処刑 裁判を開始しよう。とりあえず、このまま窓から突き落とせばいいんじゃないかな？

我らFクラスの嫉妬の力、とくと味わえ！！

「あの一！」

雄二への執行を開始しようとしたその時、鈴の鳴るような声が聞こえてきた。

「ま、まずは落ちついてください。そして私の話を聞いてはいただけませんか」

雄南ちゃんだ。

「私と兄さんは本当の兄妹です。それは戸籍もありますし間違いはありません。私が二年生なのは双子だからです。とりあえず兄さんを離してください!」

凜とした芯の通った声に思わずバツの悪そうな顔をするFクラスメンバー。覆面で見えないけど。

「兄さん…大丈夫ですか?」

「あ、ああ…雄南、助かった」

雄二に歩み寄り労わりの言葉をかける雄南ちゃん。畜生、やっぱり羨ましいなあ…。

「えー、皆さん席についてください」

異端審問会も結局うやむやに終わり、暗幕を片づけている所で担



任の先生がやってきました。

「おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願  
いします」

そうして先生は黒板に自分の名前を書こうとして…やめました。  
チヨークは普通は支給されてる物だと思っただけですが…？

「雄南」

と、そこで私のすぐ後ろの席に座っている兄さんが話しかけてき  
ました。

「はい？」

「体は平気か？」

「……大丈夫ですよ」

昔から兄さんは私の事を何かと気にかけてくれて、少し過保護な  
所もあるのですが、良い兄さんです。

だからこそ、心配をかけたくはないのですが。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

兄さんと話していると何やら自己紹介らしき声が聞こえてきまし  
た。

そして自己紹介をしていたのは男性の制服を着ている美少女…、

男装の麗人か何かでしょうか？

「……………土屋康太」

次の方は小柄な体格で物静かな感じがする男性。細く見えますけど意外と引き締まっています。

あ、そういえば私も自己紹介の言葉を考えなければなりませんね。何を言いましょうか…。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

考えているうちに聞こえてきた声、今度は珍しく女性の声です。仲良くなれると。

「趣味は吉井明久を殴る事です」

仲良く      なれるのでしょうか？

そして兄さんの隣では吉井さんが明らかに驚いています。彼女にとって吉井さんとはどういう存在なのでしょうか…。

そろそろ私の番です。何と自己紹介しましょうか…。

よし、これに決めました。確か、病院で呼んだ漫画の中にこんなセリフがあったはず。

「坂本雄南です。えーと…その……………」



般若のような顔つきで吉井さんに襲い掛かる兄さん。あ、いやあの誤解ですっ!!

大変な事になろうとしたその時、誰かがガラリと教室の扉を開けて入ってきました。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

教室にいる方達全体から驚いたような声が上がります。なぜ、そのような声を?

「丁度よかったです。今自己紹介をしている所なので姫路さんもお願います」

「は、はい! あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

背中まで届くふわふわとした髪に、制服の上からでもわかる胸。羨ましいです……。

「はいつ! 質問です!」

「あ、は、はいつ。なんですか?」

とあるクラスメイトの方が手を上げて姫路さんに質問しました。

「何でここにいるんですか?」

質問の意味がよくわかりません。姫路さんは本来ここにいるべきではない人物、ということなのでしょうか？

「そ、その……。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

どうやら体調不良で欠席した場合は無得点扱いになるみたいです。その話を聞いて、クラスの方々がざわめき始めました。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、科学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

知りませんでした…皆さん、色々な理由があってFクラスに来ていたのですね……。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

自己紹介が終わって、慌てて吉井さんと兄さんの隣の席に座ろうとする姫路さん。吉井さんが何か嬉しそうな表情をしています。

もしかしたら吉井さんは姫路さんの事が好きなのでしょうか？  
だとしたら応援しなければなりませんね。

吉井さんが姫路さんに話しかけようとしています。頑張ってください。

「あのさ、姫」

「姫路」

話しかける前に兄さんによって止められました。わざとなのか、  
違うのか…いまいち判断がつきません。

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

兄さんの方に向き直りスカートの裾を直す姫路さん。当前吉井さ  
んの声は聞こえていません。

「坂本だ。坂本雄二。あと、こっちは妹の雄南だ。よろしく頼む」

「ふえ！？」

に、兄さんいきなり話を振らないでください！ 確かに、兄さん  
が言わなければ姫路さんと話したりはできませんでしたけど…。

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「あ、いえ。こっ、こちらこそよろしくお願いひまひゅー！」

………思いつきり噛んじゃいました。

近くで吉井さんが驚いた顔をしています。いきなりだったので噛んじやっただけじゃないですか…。あ、今兄さんのアイアンクロが吉井さんの顔面に……。って、やめてください兄さん、痛そうです！！

「よ、吉井君大丈夫ですか!？」

でも結果的に姫路さんが止めてくれましたし、吉井さんも役得だったのでしょうか。

「あ、うん姫路さんありがとう…」

「い、いえ……」

顔を赤くして縮こまってしまおう姫路さん。もしかしたら、姫路さんは吉井さんの事が…？

「姫路。明久がブサイクですまん」

兄さん!？

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ…」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰」

「そ、それって誰ですかっ!？」

やっぱり、姫路さんは吉井さんの事が好きみたいです。吉井さんのフォローもして、更に吉井さんの事が好きな相手の事も聞きたがっているんですから。

でも、やっぱり私も年頃の女の子です。吉井さんの事を好きな人、ちよつと興味があったり。

「確か、久保」

久保？

「利光だったかな」

久保利光……どう考えても男性名です。

そして吉井さんは声を殺してさめざめと泣いていました。

「半分冗談だ、安心しろ」

「え？ 残り半分は？」

興味がある半分ということは、少し気があるみたいな感じでしょうか。

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」



「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

吉井さん、気になるのは解りますが、あまり騒ぐと先生に怒られると思います。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

やっぱり、先生が注意してきました。

そうして先生はパンパンと教卓を叩いて、

バキィツ バラバラバラ……

教卓が、一瞬で木くずとなりました。

「え〜……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言っって先生は教室を後にしました。

さて、先生がいなくなって暇になりました。何をしていますよるか……。

クラスメイトと話す、とはいい考えだと思えますが、ついさっき奇天烈な言動をしてしまったばかり、話そうとしても気まずいだけです。

本当にどうしましょうか……。

「のう、おま」

「はい？」

そう考えていると先程の男装の麗人…確か秀吉さんでしたっけ？  
が話しかけてきてくれました。

「なんででしょうか…？」

「いや、先程の紹介の時の話なのじゃが」

顔から火が出そうです。

やめてください！ その話はしないでください！！ 恥ずかしい  
ですからー！

「役の入り方といい顔の切り替えといい、中々役者の才能がある様  
に見えたからの」

役者の才能、って。私がやったことはそんな風に見られていたの  
ですか…。

「あ、ありがとうございます…」

とりあえず、ここはお礼を言っておくべきでしょう。例え褒めら  
れた内容が女王様でも。

「先程紹介はしたと思うがの、ワシの名前は木下秀吉じゃ。好きに  
呼んでも良いぞ」

「私は坂本雄南です。どうぞお好きに」

そんな感じで話していたら、いつの間にか居なくなっていた兄さん達が戻ってきました。

「…？」

なにか、兄さんがいつもと違います。なんというか、決意を秘めた顔立ちというか…。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれた兄さんがゆっくりと席を立ちました。そしてそのまま教壇に立ちます。不思議と、その姿は威厳と貫録に溢れていました。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

頷く兄さん。クラス代表とは確か、このクラスで一番成績が良い生徒の事でしたっけ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。……さて、皆に一つ聞きたい」

そうして兄さんが視線を移したのは、

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸置いて、静かに。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

その時の声は、まさに魂の叫び。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる!』

次々と上がる文句。みなさん不満に思ってる方も多かったようですね。

「皆の意見はもつともだ。そこでこれは代表としての提案だが」

そうして兄さんは笑いました。野性味たっぷりの、でもとてつもなく恰好いい笑みを浮かべながら。

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

そして、兄さんは引き金を引きました。

## 第二話 紹介（後書き）

こちら辺は変えようと思ってもあんまり変わりませんね…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6180p/>

---

バカと双子と妹馬鹿達

2011年1月3日19時23分発行